九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

イリノイ大学の体育・スポーツ

徳永，幹雄
九州大学健康科学センター

https://doi.org/10.15017/402

出版情報：健康科学. 5, pp.87-92, 1983-03-20. 九州大学健康科学センター
バージョン：
権利関係：

紹　介

イリノイ大学の体育・スポーツ

徳　永　幹　雄*

Introduction of Physical Education and Sport in University of Illinois at Urbana-Champaign

Mikio TOKUNAGA*

1．イリノイ大学

イリノイ大学は1868年イリノイ工業大学として発足し，その後,国立大学となり,ウーバナーシャンペーン（Urbana-Champaign）のイリノイ大学を中心としてシカゴにあるシカゴ・サークル及びメディカル・センターの三つのキャンパスに分れている。
これから紹介するのは最も伝統があり，広大な敷地を持つウーバナとシャンペーンという2つの町にまたがるキャンパスである。このウーバナーシャンペーンのイリノイ大学はシカゴの南208㎞，州都スプリングフィールドの西140㎞のところにある。キャンパスは730エーカーと言われ，179の新旧の主要な建物を持ち，郊外には1,900エーカーもある広大な農業実験場を持っている。このウーバナーシャンペーンは約10万人の小さな大学町であり，周囲はとうもろこしと大豆の畑が延々と続いている。

この大学へは汽車はシカゴのユニオン駅から，バスはシカゴのグレイハンド発着所からいずれも約3時間ほどかかる。飛行機はシカゴのオヘア空港から約40分で大学の附属飛行場である小さなウィラート空港に小型機で到着できる。

大学は8つの学部と大学院大学など幾つかの附属機関を持ち，最も大きな学部はリベラル・アート・アンド・サイエンスで11,000人の学生がいる。次に工学部（5,400人),商学部（3,500人）などで，そのほかファイン・アンド・アプライド・アート（2,100人），教育（800人),アプライド・ライフ・スタディ（700人),コミュニケーション（370人）があり，日本からの留学生は商学部に多い。そして，多くの学部に日本からの研究者が訪ずれている。

学生総数は34,800人(学生26,500人，大学院生7,300人，プロフェショナル・スチューデント1,000人）のマンモス大学である。毎年9月の新学期には5,800人の新入生を迎えてキャンパスは騒やかとなる。学生の60%が男性，40%が女性であり，女子学生の姿が我国に比較して多い。

1982年，私がこの大学にに到着した4月初旬にも雪が降り，驚ろかされた。春と秋が短かく，冬が終ったかと思うと一気に夏がきて5～6月の太陽をあびて，日光浴の男女学生でキャンパス内の芝生はアザラシの群れの如く，いっぱいになる。9月の終り頃には紅葉が始まり，11月には初雪，零度以下の天候にかわり，12月から3月にかけてはミシガン湖から吹きつける冷たい風に寒い冬の生活が強いられる。このイリノイ大学に4月から12月までの約9ケ月間滞在する機会を得たので，この大学の体育・スポーツの事情を紹介してみたい。

2．アプライド・ライフ・スタディ

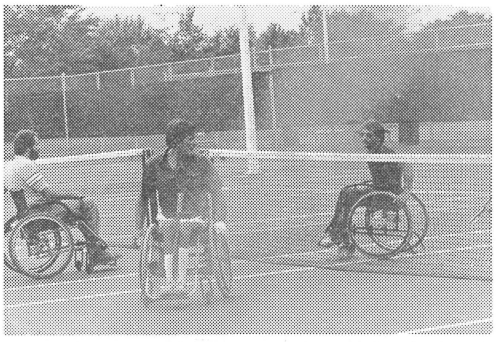
私が滞在した体育部門はCollege of Applied Life Studiesの一部門であり，この学部の前身は1932年に体育部として発足し，1957年に体育学部となったが，1974年にアプライド・ライフ・スタディ学部として組織替えされている。この学部には次のような3つの部門と2つの課がある。

最も大きいのは体育部門であり，約200人の学生と100余名の大学院生がいる。生命科学，運動の発達，

* Institute of Health Science, Kyushu University, 33 Sakamoto, Kasuga, Kasuga-shi, Fukuoka 816, Japan.

運動動作とスポーツ及びスポーツ社会科学などが30人の教授，助教授によって指導されている。第2の健康・安全教育部門は地域健康教育，公衆安全教育，学校健康教育，ドライバー教育などの指導のため11人のスタッフがいる。第3のレジャー・スタディ部門は室外レクリエーションの計画と管理，プログラム管理，治療的レクリエーションなどの指導で13人のスタッフである。なお，これらの3部門は修士及び博士課程を持ち，体育部門と健康・安全教育部門は教員免許の取得も可能である。

そのほか，リハビリテーション教育サービス課は視覚，聴覚を含めた身体的ハンディキャップを持った学生の医学的サービス，身体的セラピー，機能訓練，補てん術，カウンセリング，レクリエーションと競技，職能セラピー及び輸送サービスなどを行っている。この大学の1つの特徴は身体的ハンディキャップ学生のために全ゆる建物が機能的に作られていることであり，学内には多数の車椅子の学生を見かけ，彼等がスポーツに興ずる姿も多く，とくに車椅子のテニスなど印象深かった。第2のキャンパスレクリエーション課は後述するが，学生・教職員のための校内競技，自由時間のスポーツなど多様なプログラムを運営・管理している。



車椅子学生のテニス（チェンジコート）

3．イリノイ大学の体育

(1)　教育面

体育実技は10年前から必修科目からはずされ，将来も必修になることはないだろう，ということであった。多くの学生は選択科目としてバスケットボール，テニス，水泳，ゴルフなど多くの身体活動コースを選択しているが，その指導者の約9割は大学院生に任されていた。必修からはずされたことには，キャンパスレクリエーション課が多様なプログラムを実施し，いつでもスポーツを楽しみ，トレーニングできるように設備されている背景もある。しかし，1974年にアプライド・ライフ・スタディとして組織替えしたのは，この大学の体育がより広い視野をもつ目的があったとはいえ，伝統ある体育部門の地盤沈下のためといわれている。

体育部門のスタッフは教授8人，アソシエイト教授11人，アシスタント教授11人の30人である。バイオメカニクス，運動生理，運動学習などの実験室があり，バイオメカニクス2人，運動生理5人，スポーツ医学3人，スポーツ社会学3人，スポーツ心理学2人，教師教育2人，運動学習2人のほか，カリキュラム，スポーツ史，ダンス，管理，発達などの分野のスタッフがいる。

一方，多くの大学院生がおり，例えば，運動生理研究室が最も多く約30人で，身体の組成や構造，呼吸循環機能と代謝，神経筋肉活動の動作分析などの研究・教育が指導されている。バイオメカニクスにも16人の院生がいた（この研究室の紹介は東大・角田俊幸―イリノイ大学バイオメカニクス研究室―，Japanese Journal of Sports Sciences, Vol. 1 No. 3. 1982. を参照ください）。

私の感じではこの大学の体育は研究と大学院生の指導に重点が置かれているような気がした。このことはこの大学の体育部門が1964年1月から1981年8月まで162人の博士号を授与し，1959～1979年の期間では博士課程の卒業はＵＳＡで第6位にランクされたとか，全国的調査によれば，大学院の研究プログラムは〝学部の質〟とプログラムの〝有効性〟に関していずれも第3位であったと，その充実ぶりを誇っていることからも推察できる。

(2)　研究面

体育部門の年報（Annual Review of Research, 1980～1981）をみるとそのレベルの高さをＵＳＡにおけるランクで示しているのが面白い。すなわち，体育の研究者が最も多く参加するAAHPERD（The American Alliance for Health, Physical Education, Recreation and Dance）の原著論文の数は1955～1979の期間で第1位であったこと，Research Quarterly for Exercise and Sportでは1939～1979は第4位で，最近の20年間，つまり，1959～1979の期間では第1位であること，さらに，Journal of Motor Behaviorの1969～1980，International Review of Sport Sociologyの1966～1980でも，ともに第1位を示したことが報告されている。

また，1980〜1981のアカデミック・イヤーでは12冊の本，レフリーのいるジャーナルの論文35，レフリーのいないジャーナルの論文11などゝ，教官の研究活動が詳細に報告されている。さらに年報は，「The World Sport Psychology Source Book（1981）」から引用して〝シャンペーンのイリノイ大学はこの国の第1位のスポーツ心理学のプログラムとして，ペンシルバニア州立大学と共に第1位にランクされていた。……Coleman R. Griffith が1920年代のイリノイ大学での競技研究室で，スポーツ心理学プログラムを設立以来，伝統がある。このセンターはその後，スポーツ心理学の Rainer Martens, Karl Newell, Glyn Robert, そして，スポーツ社会学の John Loy, Gunther Lueshen のような学者に受継がれている〟と紹介している。ある親しかった院生はスポーツ心理学とスポーツ社会学の研究ではＵＳＡの No. 1 だろう，と話すなど，これらの年報から推測すると，この大学の研究がＵＳＡにおいて高いレベルにあることがわかる。

(3)　スポーツ心理学研究室

私が世話になった Rainer Martens Ph.D.(40才) はスポーツ心理学を担当する教授で，不安，競争，パーソナリティ，自信，イメージなどの研究分野で活躍している。32才の時 NASPSPA（North American Society for Psychology of Sport and Physical Activity）の会長をするなど早くから第1線の研究者である。現在は Youth Sports の指導者をしたり，オリンピックのノルディック・スキーチームのスポーツ・サイコロジストをするなど臨床的指導で国内をとびまわっている。最近の著書は "Joy and Sadness Children's Sport" や "Guidlines for Children's Sport", "Coaching Young Athletes" などがある。また SCAT（スポーツ競技に対する不安）や CSAI（認知的・身体的不安テスト）などの競技者に対するテストも開発している。最近はイメージを利用した競技者の心理的トレーニングを臨床的に実験している。その理論的根拠は「スポーツにおけるイメージ」として発表している（九州体育学会第2分科会発表資料，1983，参照）。彼のもとには P.h.D コースの大学院学生が4人いて，私は彼等にも世話になった。

マーテンズ教授はこれまでの実験室での研究を避け，研究の場をスポーツの現場に移し，スポーツ心理学の理論を臨床的に応用することに精力を傾け，それに成功した一人といわれている。このことは我国の体育心理学が直面している課題でもあり，示唆をうけることが多かった。

もう一人の教授，Glyn C. Robert（40才）は動機づけ，競争，テスト（achievement）の研究分野で，1982〜1983 の NASPSPA の会長でもある。残念ながら彼とはあまり交流がなかった。

次に，私が授業に参加した2つのスポーツ心理学の講義内容を紹介する。

①　スポーツ心理学（P.E. 447, 1981）

担当，ライナー・マーテンズ，週1回，3時間，受講者は大学院学生10名前後，春学期

1．1/18　スポーツ心理学の紹介，競争過程の理解
2．1/25　スポーツ性格学
3．2/ 1　競争性と動機づけ
4．2/ 8　動機づけと心理的スキル・トレーニングの紹介
5．2/15　イメージ
6．2/22　エネルギーの支配とフロー（flow）
7．3/ 1　競争的不安の理解
8．3/ 8　身体的リラクセーション技法とバイオフィードバック
9．3/22　メンタル・リラクセーション技法
10．3/29　目標設定
11．4/ 5　競争的ストレスの注入（inoculation）
12．4/12　怒りと苦痛のコントロール
13．4/19　心理的スキルコースのプロジェクト報告(1)
14．4/26　心理的スキルコースのプロジェクト報告(2)
15．5/ 3　倫理的問題とレビュー（文献，ジャーナルなどの紹介）
16．5/11　最終試験（1.30〜4.30）

②　スポーツ心理学入門（P.E. 247, 1982）

担当，デイモン・バートン，協力者，ライナー・マーテンズ教授と2人の大学院生，週3回，各50分，体育学部学生及び一般学生，約30名，秋学期で期間は8/30〜12/20 まで。

1．スポーツ心理学の紹介
2．スポーツ心理学の歴史と現状
3．競争を理解すること
4．競争を経験すること
5．スポーツ性格学(1)
6．　〃　(2)
7．　〃　(3)
8．動機づけを理解すること

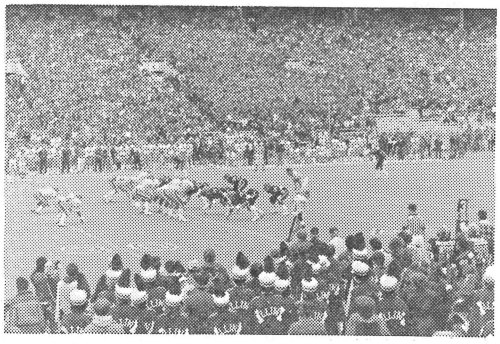
9．競争性
10．本質的な動機づけ
11．チームの力動性の紹介
12．チームの凝集性
13．コミュニケーション(1)
14．　〃　(2)
15．攻撃性
16．青少年スポーツの心理の紹介
17．未組織対組織的青少年スポーツの比較
18．コーチングの哲学
19．強化の原則を理解すること
20．青少年競技者の動機づけ
21．中間試験及びノート提出
22．試験についてのレビュー
23．心理的技術の紹介
24．エネルギーの支配
25．フロー
26．身体的リラクセーション(1)―漸進的筋力リラクセーション―
27．身体的リラクセーション(2)―バイオフィードバック―
28．身体的リラクセーション(3)―催眠―
29．イメージ(1)
30．　〃　(2)
31．　〃　(3)
32．メンタル・リラクセーション(1)
33．　〃　(2)
34．競争的ストレスの注入(1)
35．　〃　(2)
36．　〃　(3)
37．自信についての紹介
38．目標設定(1)
39．　〃　(2)
40．苦痛のコントロール
41．怒りのコントロール
42．試合前の準備
43．心理的技術のトレーニングの設定(1)
44．　〃　(2)及びレビュー
45．最終試験（1.30～4.30 PM）

4．イリノイ大学のスポーツ

(1) 対校競技

学生便覧（Undergraduate Programs, 1981～1983）によれば,「イリノイ大学は次のような男女の対校競技を積極的に支援し，すべての学生競技者のために高度なプログラムを与えるために委任されている」と述べられている。つまり，男子は野球，バスケットボール，クロスカントリー，フェンシング，フットボール，ゴルフ，体操，水泳，テニス，陸上競技，レスリングの11種目がある。女子はバスケットボール，クロスカントリー，ゴルフ，体操，とび込み，テニス，陸上競技，バレーボールの8種目がある。すなわち，大学が援助する競技はこれらの種目に限定されている。そして，各チームは少数精鋭で代表選手だけである。たとえば，男子バスケットボールチームは部員15人，ヘッドコーチ1人，アシスタントコーチ4人の構成である。コーチ陣はいずれもパートで，週40時間のコーチ2人，週20時間のコーチ2人とヘッドコーチが大学と雇用関係を結んでいる。ご存知のように成績が悪ければ，契約が解消されるという。私の大学は部員が30人ほどいるというと，日本のバスケットボールは何人でするのか，と笑われた。男子テニスチームは10人，女子のテニスチームは12人であった。彼等の感覚では対校戦ができるだけの部員数がいれば十分であり，それ以上は無駄ということである。とくにバスケットボールとフットボールは特待生が多く，シーズン中は特別の食堂で豊富な栄養をとっていた。全学で約70人のコーチがいるとのことであった。

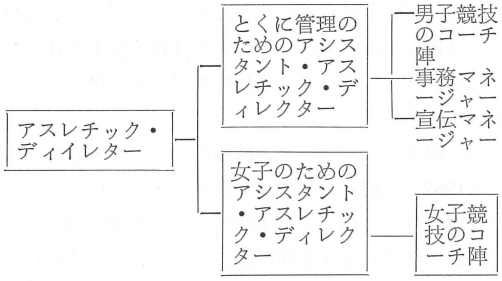
各競技の年間スケジュールはカード,パンフレッド,カレンダー，ポスターなどの形式でシーズン前に配布され，どの日に何のスポーツ大会があるかすぐわかる。人気のバスケットボールやフットボールは選手の顔写真入りのポスターとして配布している。私が観戦したフットボールの試合は入場料約2,500円で75,000人の観衆，バスケットボールの新入生と2年生以上のシーズン前の顔見せの試合でさえ7,500人であった。どこから集まるのか，どうして人気があるのか見当も



75,000人を集めたフットボールの対校戦
（イリノイ大学対ピッツバーグ大学）

つかない。イリノイ大学を必死で応援する観衆の姿は日本の東京6大学野球に似た感じであった。

大学はすぐれた選手とコーチを集め，対校戦に力を入れる。ラジオやテレビの放送権や入場料の収入は莫大となる。この大学ではバスケットボールとフットボールの選手は特別扱いであるとバスケットボールのコーチの一人が話してくれた。この対校競技を支える組織は「競技に関する学部委員会」があり，下図の如く



組織され多くのコーチ陣と事務職員によって運営・管理されるという。我国との組織の違いを痛感させられた。

(2)　校内スポーツ

校内スポーツはアプライド・ライフ・スタディ学部のキャンパス・レクリエーション課が運営・管理している。スポーツやレクリエーションのための施設としてゴルフコース，プール（室内，室外），体育館，トラック（室内，室外），テニス，バスケットボール，ハンドボール，アイススケート，ピストル射撃，プレイ・フィールド（多目的な芝生のグランド）などを持っており，我国の大学とはくらべものにならない。多様なプログラムが組まれ，多くの学生，教職員，地域住民が参加できるように配慮されている。次のようなプログラムから，その多様さを読みとることができる。

①審判の募集と養成

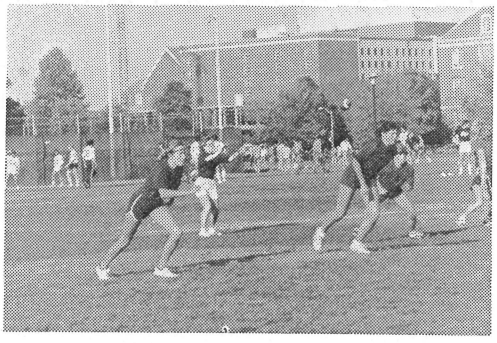
バレーボール，タッチフットボール（タックルのかわりに身体にタッチする），サッカー，水球，アイスホッケー，バスケットボール，レスリング，フロアホッケー，インドアサッカーなどの審判を募集し，そのトレーニングをする

②大学院，教職員のスポーツ大会

テニス，バレーボール，タッチフットボール，サッカー，バドミントン（単），ラケットボール（単，卓球のラケットより少し大きくてテニスのラケットのようにガットをはったラケットを用いて室内でのスカッシュに似たスポーツ），ハンドボール（単，手でボールを打つ），バスケットボール（練習のみ），卓球（単），バドミントン（複），室内陸上，バスケットボール，ラケットボール（複），ハンドボール（複），卓球（複），水泳，ソフトボール（12インチ，これがレギラーサイズ），テニス（複），ゴルフ（2人1組で良いほうの記録を採用），室外陸上

③女子のスポーツ大会（学生，大学院生，教職員）

テニス（単），2ピッチソフトボール（投手は打者に2回しか投げない），フットボール，バドミントン（単，複），ラケットボール，フィールドホッケー，バスケットボール（3人制），バレーボール，室内陸上，バスケットボール，ブルームボール（氷上にボールを転がし，遠くまで転がるようにホウキで氷上を掃く），ラケットボール（複），ホット・ショット・コンテスト（バスケットボールのシュートだけ），ソフトボール（12インチ及び16インチの大きい軟かいボール），バレーボール（4人制），テニス（複），フロアーホッケー，室外陸上



盛んな女子学生のスポーツ
（タッチフットボールの校内大会）

④男子学生のチーム・スポーツ大会

バレーボール，タッチソフトボール（A，Bクラス），サッカー，ゴルフ，水球，室内陸上，レスリング，バスケットボール（A，Bクラス），フリースロー・シュート，ボーリング，水泳，ソフトボール（12インチと16インチ），室外陸上

⑤男子学生の個人及びペア・スポーツ大会

テニス（単），バドミントン（単），ラケットボール（単），卓球（単），バドミントン（複），室内陸上，レスリング，フリースロー・シュート，ラケットボール（複），ハンドボール（複），卓球（複），水泳，テニス（複），ゴルフ（2人1組で良いほうの記録を採用），室外陸上

⑥イリノイ大学オープン・スポーツ大会

これは大学生，大学院生，教職員，地域住民などこ

の町の誰が参加してもよい。テニスの好きな私は40才以上のAクラスに出場した。試合は土，日以外は夕方の5時〜12時近くまでナイターで行われ，参加者はボール持参で，敗者は使用球を持ち帰り，勝者は未使用球を次の試合に持参する。審判はすべてセルフジャッジ，種目は年令別，技術別に分類され，運営は二人で行い，省力化して合理的に運営していた。中学生，高校生，大学生，住民が参加するというオープン形式である。つぎのような種目がある。

バレーボール，2ピッチソフトボール，タッチフットボール，サッカー，ゴルフ（チーム），サイクリング，クロスカントリー，フリスビーの距離投げ，ライフル射撃，水球，アイスホッケー，バスケットボール（練習），ビリアード（8ボール），ベンチ・ペレス・コンテスト，室内陸上，バスケットボール，5フィート9インチ・バスケットボール（身長が175cm以下の者だけ），フリースロー・コンテスト，アイスホッケー，ブルームボール，室内サッカー，1対1のバスケットボール，投げ矢，アーチェリー，パットだけのゴルフ，ビーチボールによるバレーボール，スノーボール・ソフトボール（雪の中でのソフト），フィッヒルボール（whiffleball，プラスチックの軽いボールを打つ），ボーリング，ソフトボール（12インチ，16インチ及び12インチの速いピッチ），サッカー，バレーボール（4人制），ゴルフ（2人組），室外陸上，ホームラン・ダービー，ホースシューズ（馬てい投げ）。

⑦男女混合のスポーツ大会

バレーボール，ラケットボール（複），フットボール・トーナメント，ブルームボール，バスケットボール，卓球（複），室内陸上，インナーチューブ水球（自動車のチューブの中に浮んでする），ボーリング，バドミントン（複），水泳，ソフトボール（12インチと16インチ），バレーボール（4人制），フロアーホッケー，テニス（複），室外陸上。

以上のようなプログラムは校内スポーツ・カレンダー（1982—1983）として，1枚のポスターにまとめられ，申し込み期間，プレイ開始日などが新学期に校内に宣伝される。全ゆる種目が省力化され，合理的に運営されている。わが国の大学とは組織的にも異なるが，これだけの校内スポーツ大会とそれを実施する施設と人材に恵まれていることに羨望の念を抱いた。また，女子学生のスポーツ活動の豊富さは，これからの我国の課題でもあるが，男子同様にフットボールを楽しむ姿にアメリカ女性の逞しさを感じた。